

オホーツク海で漁獲されるホッケの多くは北部日本海～オホーツク海群に属し、中央水試を主幹として、稚内水試と網走水試が共同で資源評価を行っています。今回はホッケの生態<sup>\*1</sup>についてご紹介します。

《分布》ホッケは分布や産卵期の違いから、4つのグループ（群）に分けられると考えられています（図1）。ユーラシア大陸東岸に分布する「沿海州群」、襟裳岬西岸から南部千島、羅臼沿岸にかけての「羅臼～太平洋群」、道南日本海から道南太平洋および本州沿岸にかけての「道南～本州群」、そして、オホーツク海から道北日本海にかけての「北部日本海～オホーツク海群」（以下、道北群）です。

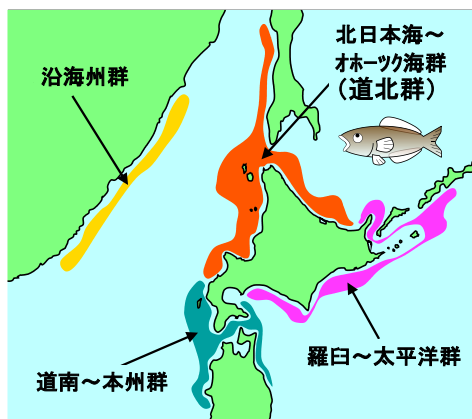


図1 ホッケのグループ分け

《成長・回遊》道北群の子魚は、1月頃、利尻島・礼文島周辺や武蔵堆などの産卵場で卵から孵化し、その後海の表層を漂いながら、日本海中央水域からサハリン沿岸やオホーツク海へ分布を広げつつ移動します。0歳の秋頃には体長20センチメートルくらいに成長し、水深100メートル前後の大陸棚上に着底し、比較的平坦な海底付近を群をなして回遊します。この頃からオホーツク海では底建網や沖合底びき網等の漁獲対象となります。オホーツク海に着底したホッケは1歳の春～初夏には体長25センチメートル前後になり活発に索餌回遊しますが、多くは産卵のため1歳の冬までに日本海に回遊します。オホーツク海に残ったものも、満2歳までには日本海に回遊すると考えられています。日本海で産卵を行った後、高齢になるにつれて日本海の岩礁域に定住するようになります。したがって、オホーツク海で漁獲されるホッケは未成魚が中心であり、秋の0歳魚と、それが成長した春の1歳魚が大部分を占めます。

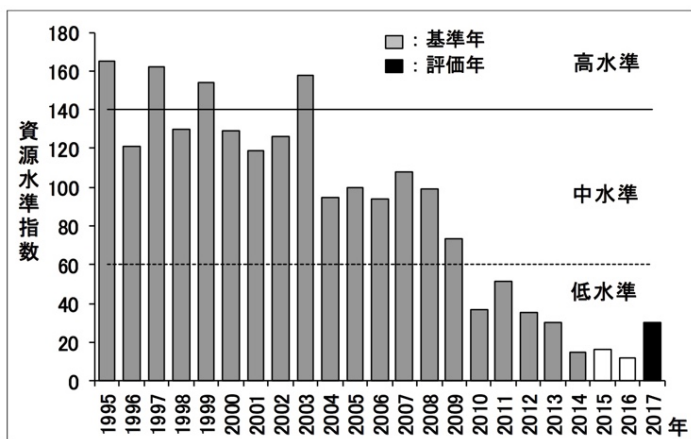


図2 道北群の資源水準指数 (2018年資源評価書から)

《資源水準》網走水試で現在編集集中の平成29年度事業報告書では、オホーツク海のホッケの漁獲量は沖底漁業では6年ぶり、沿岸漁業では5年ぶりに前年の漁獲量を上回ったことを報告しています。漁獲量が増えた要因として、最新の資源評価書<sup>\*2</sup>によると道北群の2017年級（その年生まれの群）が近年では比較的高豊度であったことが挙げられています。一方で、道北群は資源水準としてはいまだ「低水準」、資源動向は「横ばい」との評価で、低水準となった2010年以降産卵に参加する親魚が少なく、産み出される未成魚のオホーツク海への来遊が期待しにくい状況になっています。オホーツク海で毎年ホッケが豊漁になるには、2012年から開始された自主的管理措置を継続し、未成魚段階で少しでも多く残り残して親魚を確保することが重要です。特に、2019年の秋からは2017年級が産み出す「2019年級」がオホーツク海で漁獲対象となります。これらを一定数を残り残して親魚として産卵させることができれば、ホッケが将来にわたってオホーツク海へ来遊し、安定した漁獲が得られるようになるかもしれません（図2）。

(網走水試 佐々木義隆)



\*1 <https://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/wakkanai/section/zoushoku/inpvt40000000878.html>

(稚内水試 HP: さかなの基礎知識, 「ホッケの分類、形態、生態(分布・成長・回遊・繁殖)」および稚内水試・鈴木祐太郎研究職員の情報による)

\*2 <http://www.fishexp.hro.or.jp/exp/central/kanri/SigenHyoka/Kokai/> (2018年度資源評価書)